

地域課題解決のための研究レポート

～ 中心市街地の活性化及びアートのまちづくりの「これから」について ～

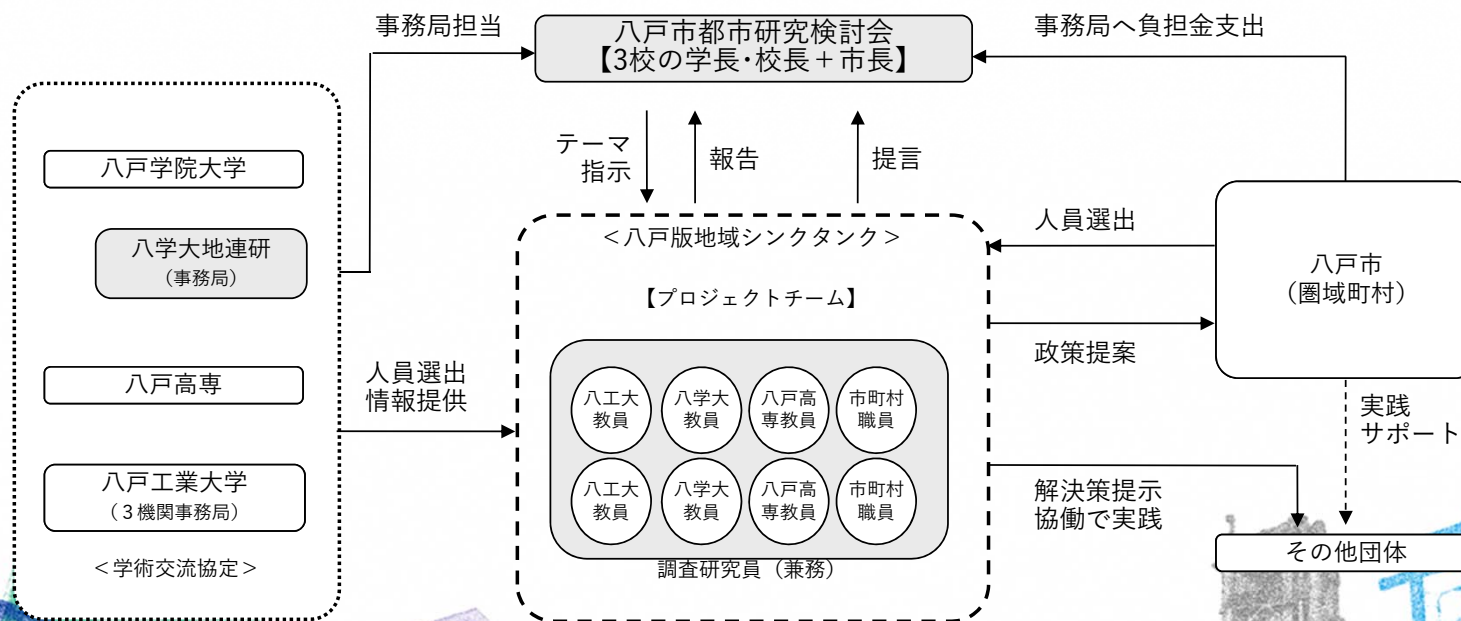
令和3年11月

八戸市都市研究検討会
第13弾テーマプロジェクトチーム



八戸市都市研究検討会の概要

- 八戸工業大学、八戸学院大学、八戸工業高等専門学校との3校と市が連携し、地域が有する政策課題等を協議するため、八戸市都市研究検討会を設置している。
- 平成21年度から令和2年度まで12のテーマについて調査研究を行っている。



レポートの趣旨

令和3年7月に八戸市都市研究検討会プロジェクトチーム宛に依頼のあった「第7次八戸市総合計画策定に係る意見提案」について、我々が令和3年度に進める「アート及び新美術館を軸とした中心市街地活性化に関する研究」の観点から、地域の重要課題として挙げられる「中心市街地の活性化」及び「アートのまちづくり」に関する研究結果を本レポートにまとめ、八戸市総合計画策定委員会に報告するものである。

1 中心市街地の現状と課題

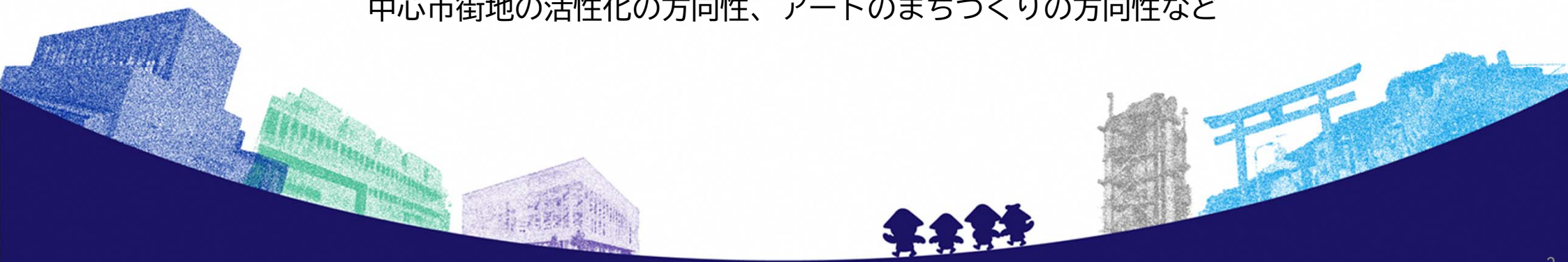
中心市街地における都市機能の集積、中心市街地の人流データなど

2 アートのまちづくりー8つの事例

他都市におけるアートのまちづくりの事例など

3 アート・新美術館を軸とした中心市街地の活性化

中心市街地の活性化の方向性、アートのまちづくりの方向性など



アート及び新美術館を軸とした中心市街地活性化に関する研究」の要旨

- ✓ 令和3年度、八戸市新美術館【以下、新美術館】が開館する。当該施設の基本理念として、第一に、アートの文脈で地域を語り「八戸の美」に迫る美術館、第二に、アートが中心にある環境で「八戸の人」を育む美術館、第三に、アートの力を「八戸のまち」に波及させる美術館、の3点を掲げており、グローバルミュージアム事業、アートエデュケーション事業、アートのまちづくり推進事業を行う予定としている。
- ✓ また、青森県立美術館や十和田市現代美術館などの県内美術館5館と「青森アートミュージアム5館連携協議会」を発足し、共同プロジェクトを進めるなど、アートを通じた全県的な地域の活性化に向け、様々な取組が進められているところである。
- ✓ 一方で、中心市街地に建設予定の公共施設も一通り完成した中、今後の施設間連携や地域との結びつきのあり方について、一層の議論が期待される場所である。「第3期中心市街地活性化基本計画」においては、「旧美術館跡地及び市有地の有効活用を図りながら、新しい美術館を建設することにより、来街者の増加や回遊性の向上に寄与することが見込まれる」とされていることから、新美術館の完成を機に、各文化施設の特徴を生かしながら、関係諸団体、中心商店街等と連携を深め、多様な結びつきが生まれることで、これまでになかった相乗効果が発揮され、中心市街地の魅力向上につながるものと期待される。
- ✓ 特に、中心市街地活性化への寄与という点では、若者の事業への参加が重要である。教育としての観点に加え、高校生・大学生が積極的かつ主体的に関与する事業が推進されることで、若者の地元定着につながる効果も期待される場所である。
- ✓ 以上を踏まえて、第13弾の研究テーマとしては、新美術館の完成による「アートのまちづくり」の推進について、中心市街地文化施設との連携や中心商店街等の関係諸団体との結びつき、学生に向けた取組などのあり方をテーマとして研究を行うこととする。



中心市街地の現状はどうなっているのか。
また、現状を浮かび上げる中心市街地活性化のための課題は何か。



1. 中心市街地の現状と課題①

(仮) 第3期八戸市中心市街地活性化基本計画の概要

将来像 多様な機能が集まり、多彩な人々が行き交う、八戸らしい文化を育むまち

基本方針

- 多様な都市機能が集積した活力あるまちづくり
- 地域経済の活力向上
- 移動しやすい、暮らしやすいまちづくり

計画期間

平成30年12月1日
～ 令和6年3月31日

区域面積

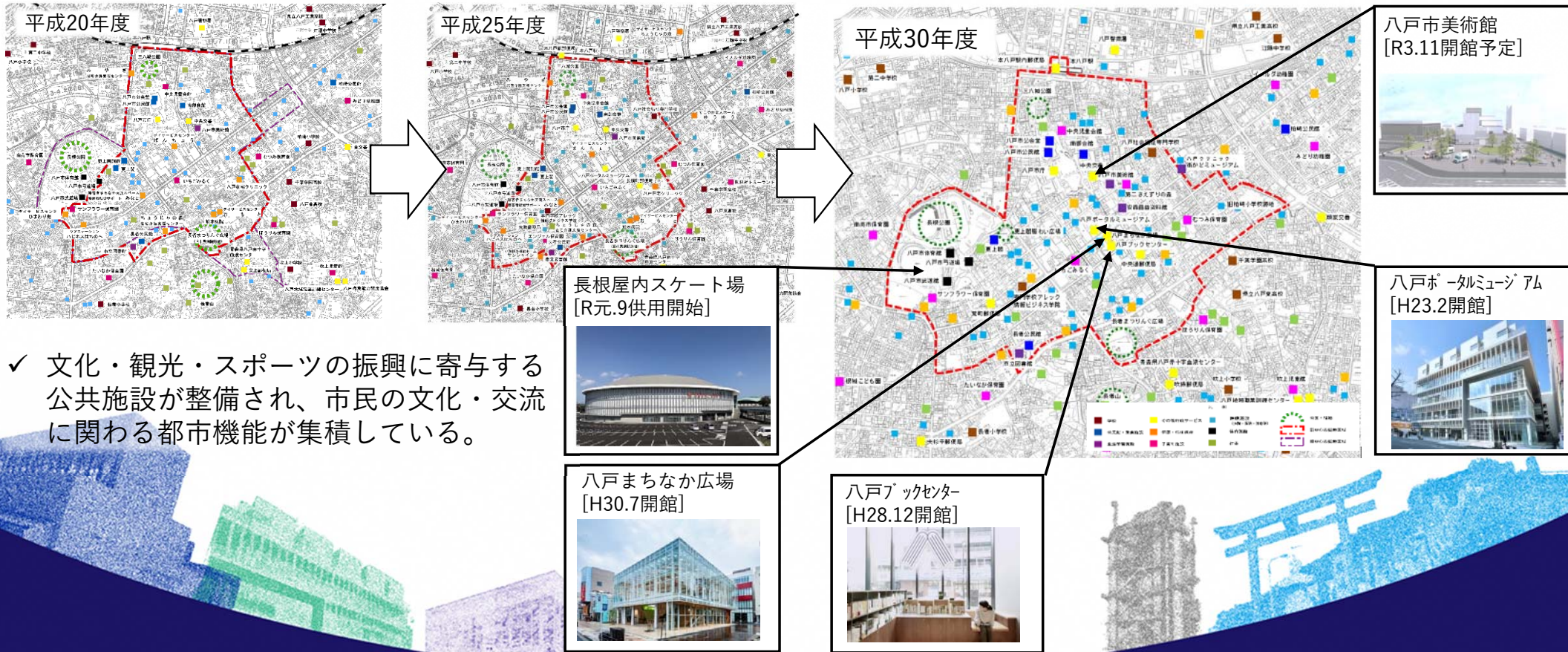
約137ha

目標	目標指標	基準値(H29)	目標値(R5)	現状	
				R元	R2
街なかの賑わい創出 (来街機会の創出と回遊性の向上)	歩行者通行量 (平日・休日の合計、11地点)	66,653人	75,600人	58,028人	48,217人
	公共施設来館者数 (八戸ポータルミュージアム・美術館・屋内スケート場・八戸ブックセンター・八戸まちなか広場)	1,167,000人 (過去3年の平均値)	1,968,000人	1,650,048人	965,996人
起業者支援と魅力ある 商店街・オフィス街づくり	空き店舗・空き地率	11.6%	8.2%	12.1%	12.1%
	(参考指標) 創業等支援件数	7件/年	年平均10件 (H30～R5年度)	15件 (H30～R1年度)	12件 (H30～R2年度)
	誘致企業就業者数	△16人 (H29～30年)	230人 (H30～R6年)	162人 (H30～R1年度)	216人 (H30～R2年度)
街なかの居住推進と 移動の利便性向上	中心市街地における人口の社会増減数	△51人 (H25～29年度)	70人 (H30～R5年度)	△70人 (H30～R1年度)	35人 (H30～R2年度)

✓ コロナ禍の影響もあり、特に街なかの賑わい創出に係る目標指標の数値が低迷している。

1. 中心市街地の現状と課題②

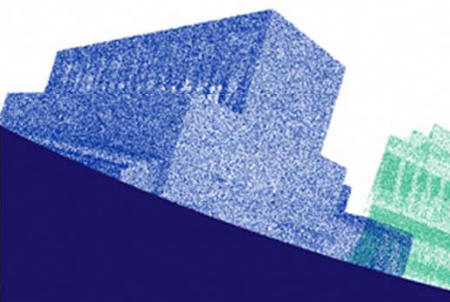
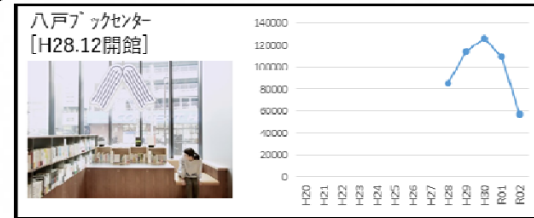
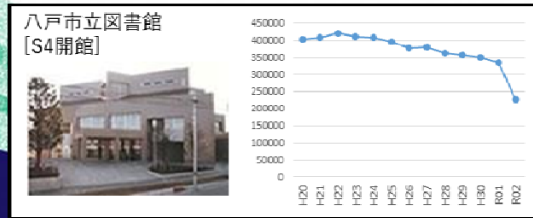
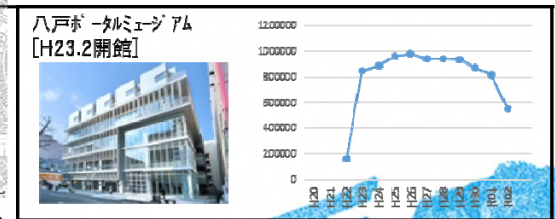
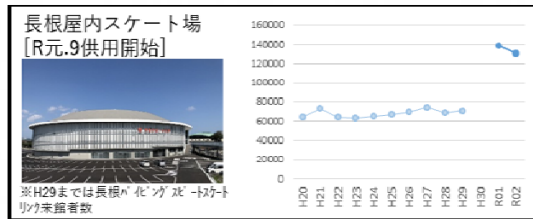
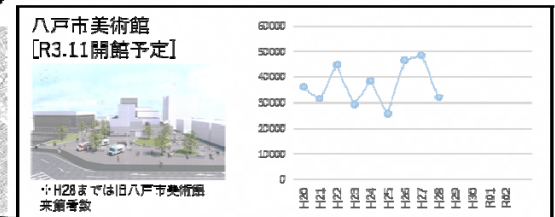
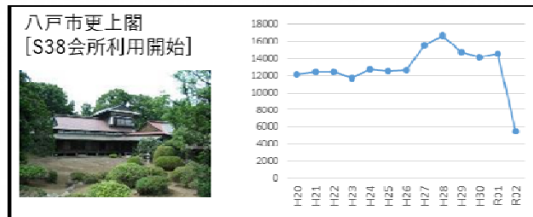
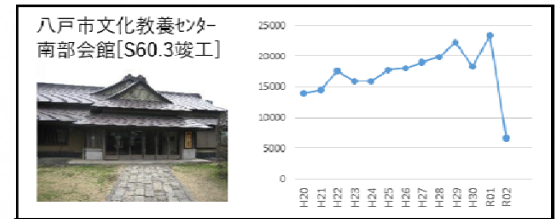
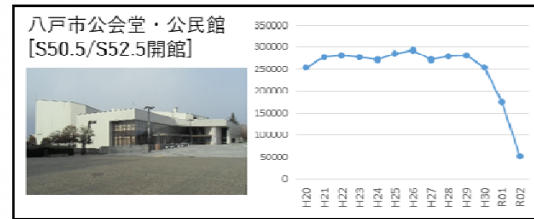
(仮) 中心市街地における都市機能の集積



1. 中心市街地の現状と課題③

中心市街地文化交流施設等の利用状況

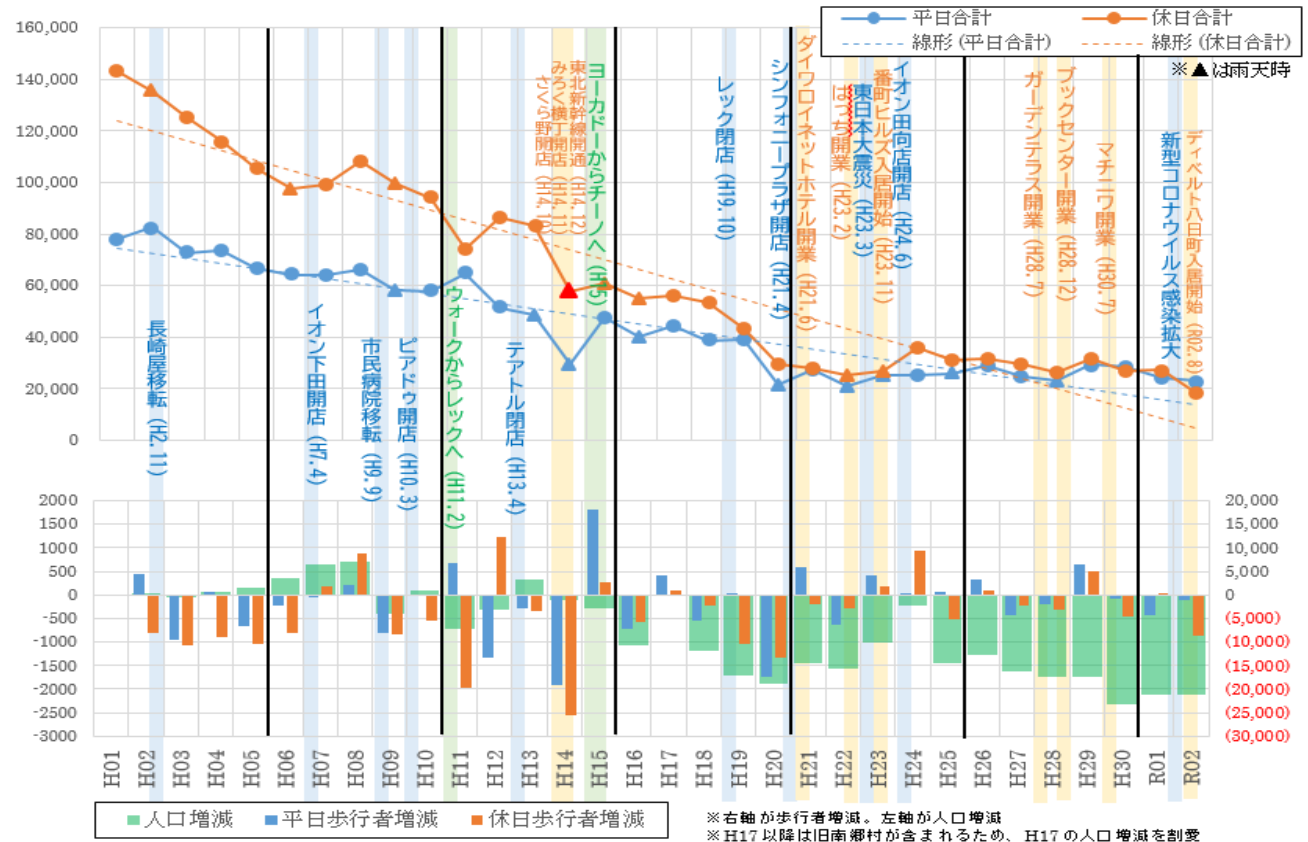
- ✓ 施設ごとの利用者数は減少傾向がみられる中、コロナ禍の影響もあり令和2年度に大幅な減少となっている。



1. 中心市街地の現状と課題④

(仮) 中心市街地8地点の歩行者通行量の推移

- ✓ 歩行者通行量は減少傾向であり、特に平日と休日の歩行者通行量の差が少なくなっている。
- ✓ 平成20年度以降、文化交流施設の開館以降に歩行者通行量の増加が見られ、来街機会や回遊性の向上への効果が見られる。

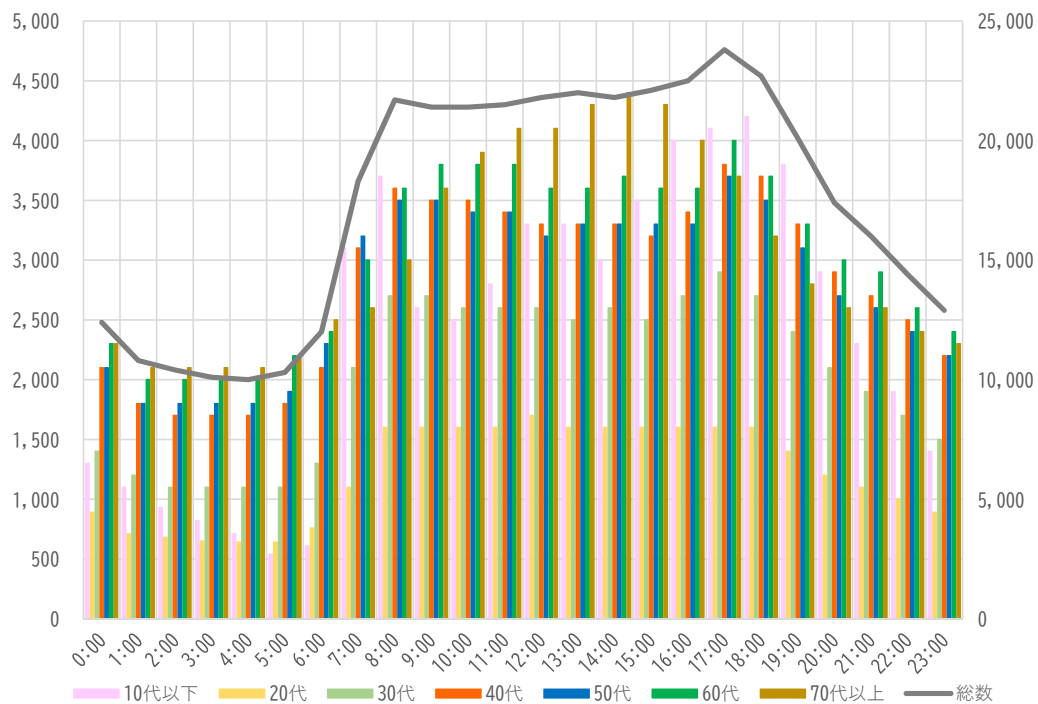


出典：中心商店街歩行者通行量調査（八戸商工会議所及び八戸市）

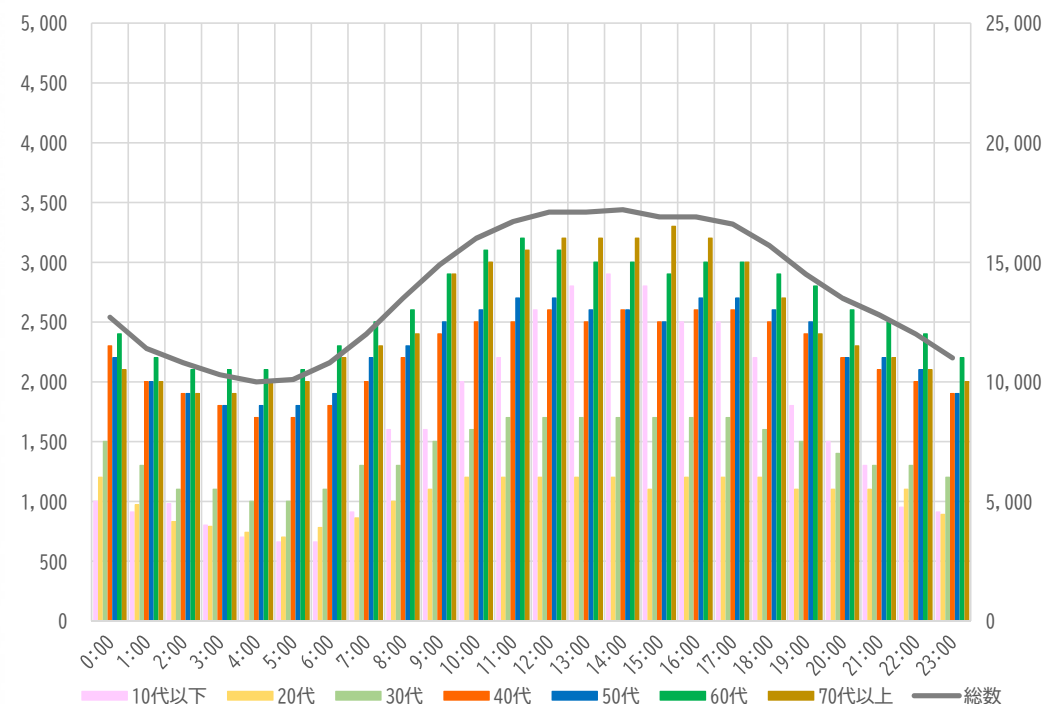
1. 中心市街地の現状と課題⑤

(仮) 中心市街地の時間毎年代別の滞在人口の推移 (令和元年10月～令和2年9月平均)

平日 日単位平均



休日 日単位平均



出典：ヤフーデータソリューション DS.INSIGHT

- ✓ 滞在人口は休日より平日の方が多く、平日は17時にピークを迎える。
- ✓ 平日の16時から19時の時間帯、10代以下の滞在人口が、他の年代より多い傾向が見受けられる。

1. 中心市街地の現状と課題⑥

(仮) 中心市街地活性化のための課題

1 来街機会の変化への対応

中心市街地の来街・滞在人口は休日型から平日型へ変化してきており、中心市街地を取り巻く情勢の変化に併せて来街機会も大きく変化してきていることから、その変化を多角的に捉え対応していくことが必要。

2 滞在機会の多い10代来街者への働きかけ

中心市街地には10代以下の若者が少なからず滞在しており、潜在的な若者の来街を好機として活かしながら、中心市街地活性化に寄与する若者の事業への参加を働きかけることが必要。

3 文化交流施設の活用と連携

文化交流施設の整備に伴い創出される新たな来街機会を活かすため、その効果を持続させるための仕組みや、各施設が連携できる取り組みが必要。



アートのまちづくりに関して、
他都市ではどのような事例があるのか。



2. アートのまちづくりー8つの事例①

アートトリエンナーレ

『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ』（新潟県十日町市）

概要	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 新潟県十日町市・津南町を舞台に3年に1回開催される国際芸術祭 ➢ 2000年に第1回目、2018年までに7回開催 ➢ 作品活用のため季節毎のイベントも開催
背景	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 第1～2回: 県補助金、市町村負担金 ➢ 第3回以降: 国庫補助金その他、企業等からの寄付金・協賛金が主な収入源
運営体制	新潟県、十日町市、津南町、市内経済団体、観光・旅行団体、教育関係団体、市民活動団体等からなる「大地の芸術祭実行委員会」を組織し運営を行っている
開催効果	<ul style="list-style-type: none"> ➢ ごみの不法投棄の減少 ➢ アート要素を取り入れたパッケージデザインの変更によるお土産品の売上増加 ➢ 移住者・起業家の増加
成功要因	<ul style="list-style-type: none"> ①開催目的が一貫してぶれていないこと ②地域に関わる人が取組を推進していること ③芸術祭（アート）を「かすがい」として人と人との交流を生み出していること ④地域住民の主体性の素地ができたこと



『こへび隊』による古民家清掃



棚田を利用した作品『かかしプロジェクト』



廃校と活用した作品『絵本と木の実の美術館』²

出典：越後妻有アートトリエンナーレHP

2. アートのまちづくりー8つの事例②-1

アーティスト×八戸

風のひかりのみち～本八戸駅通り「光のプロジェクト」(青森県八戸市)

概要	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 美術家・安岐理加氏によるプロジェクト ➢ 平成20年12月20～25日に開催 ➢ 市内で子どもを中心としたワークショップを実施し、リサイクル工作で風車を作成 ➢ のべ百数人の参加者により作成された風車を三八城公園にインスタレーション作品として展示し鑑賞会を実施
背景	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 八戸高専河村研究室において、2000年代後半の数年間、冬季に本八戸駅通りにイルミネーションを設置するプロジェクトを実施 ➢ 活動内容が恒常化する中、安岐氏に指導を依頼し、八戸高専生と安岐理加氏のコラボレーションが実現した
効果	参加した学生の貴重な経験を創出するとともに、アーティストと地域住民の創造的交流が生まれた
展開	安岐氏は本プロジェクトをきっかけに、八戸市の鮫・湊地区においても漁師を取材するプロジェクト『うみの話』を手掛けた



安岐氏と学生によるイルミネーション作成風景



本八戸駅通りへのイルミネーション設置

出典：八戸工業高等専門学校河村研究室

2. アートのまちづくりー8つの事例②-2

アーティスト×八戸

「まちのうわさ」→「まちぐみ」への展開（青森県八戸市）

概要	<ul style="list-style-type: none"> ➢ アーティスト山本耕一郎氏による取組 ➢ 山本氏が自ら商店等に出向いて取材を行い、漫画の吹き出しのようにデザインされた無数の「うわさ」を街中に展示するもの
背景	<p>他都市での山本氏による「うわさプロジェクト」を見た市職員が、山本氏に八戸市でのプロジェクト実施を依頼したことをきっかけに八戸市においても活動が展開された</p>
効果	<ul style="list-style-type: none"> ➢ うわさプロジェクトに興味を持った市民が自主的に制作作業に参加 ➢ アーティストが持つ創造性と実践的エネルギーによって、「なんか楽しそう」な取組を持続的に発信 ➢ 山本氏を中心に、集団として開かれた求心力を発揮している
展開	<p>はっち開館から4年後、中心市街地の活性化を目指すために、まちぐるみでまちを元気にしていく市民ボランティア集団『まちぐみ』が設立された（組員は2020年3月現在 492名）</p>



山本耕一郎氏



活動に参加する学生たち

出典：八戸工業高等専門学校河村研究室



2. アートのまちづくりー8つの事例③

アート×滞在

『グッゲンハイム美術館ビルバオ』（スペイン）

～美と食を通じた新しいまちづくり～

概要	重工業で発展した街を「文化都市＝アートのまち」に転換するべく、製鉄や造船所が集積したネルビオン川岸の一体を再開発する計画の基幹事業として美術館建設が位置付けられた
背景	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 1980年代、ビルバオ市では産業革命以降に発展した鉄鋼業が衰退 ➤ 失業率の上昇や環境汚染の深刻化など、社会不安に陥る ➤ 市は経済再生のために都市再生計画「ビルバオ・メトロポリ30」を打ち出し、グッゲンハイム財団と美術館設立の合意協定を締結
運営手法	美術館が立地する地域に由来する作家や作品を収集 → サイトスペシフィック、コミッションワークによる作品展示 等
効果	人口増、失業率解消、観光客増加、税収増加、環境再生 → 「グッゲンハイム効果」、「ビルバオ効果」
展開	グッゲンハイム美術館を訪れた観光客は、バスで約1時間程離れた「サン・セバスチャン」を訪れ、Bar Hoppingをしてその土地の伝統料理やお酒を楽しむという過ごし方が定着している → 八戸市においても、中心街の美術館を訪れた後に、横丁めぐりを楽しむまちの過ごし方を提案できる



グッゲンハイム美術館 出典：casa #世界の建築



サン・セバスチャン 出典：casa #世界の建築HP



八戸市の横丁（鷹匠小路）



2. アートのまちづくりー8つの事例④

アート×遊休施設

『ゼロダテアートプロジェクト』（秋田県大館市）

概要	人口流出、経済の停滞が著しい秋田市大館市において、かつて市の中心部におけるシンボルであった百貨店「正札竹村」を会場として利用し、美術館の作品を展示
展開	「正札竹村」の活用後、廃校の再活用、旧映画館の再生など、大館市内の様々な遊休施設の代替的な利活用を行った
効果	市内在住の若手や市外へ移住した出身者らによる人的ネットワークの構築

『アートベース百島』（広島県尾道市）

概要	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 美術家・柳幸典のライフワークとしてアートセンターの体も成すアートプロジェクト ➢ 公立美術館での常設が難しい大規模彫刻や政治的メッセージ性を含むインスタレーション作品を展示
展開	百島の廃校を拠点に、旧映画館や役場跡、市内の港湾倉庫など、規模が異なる施設・空間を再活用
効果	美術館が受け皿となり得ないアートの実現の場として、遊休施設の再活用が有効に働いた



2. アートのまちづくりー8つの事例④

アート×遊休施設

『サイトスペシフィック／サステナブル／オルタナティブ：桐生再演』（群馬県桐生市）

概要	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 1994年に開始 市内の多数の織物工場を一時的に再活用し、同世代の美術家が多数活動 ➢ 作品の多くは、織物の町という地域性や織物工場の構造を利用 ➢ 地域固有のコンテキストに因んだものでサイトスペシフィックな意味が強い
展開	サステナブルな活動への変化に伴い、来訪・滞在する美術家の経費負担増
効果	地方都市の遊休施設の価値が見出され、実験性の高いアート表現探求が実現



旧鉦夫住宅群を活用した作品展示
©Nana Izaki/2012

『WATARASE Art Project』（栃木県日光市）

概要	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 上記取組において、桐生市から栃木県日光市足尾町へ活動範囲を拡大 ➢ 廃車両の利活用、旧鉦夫住宅群や廃校などの一時的な利活用
展開	美術家の拠点は地域住民有志により無償提供され、多くの地域を対象に活動を拡大した
効果	本来の用途と異なる遊休施設の利・再活用の提案により、アート本来の創造性を発揮し、ステークホルダーとも連携を深め、実験的なアートのまちづくり活動へ発展した



渡良瀬CampingTrainJ
©Shinpei Minagawa・Rina Hizatate(2006-2008)

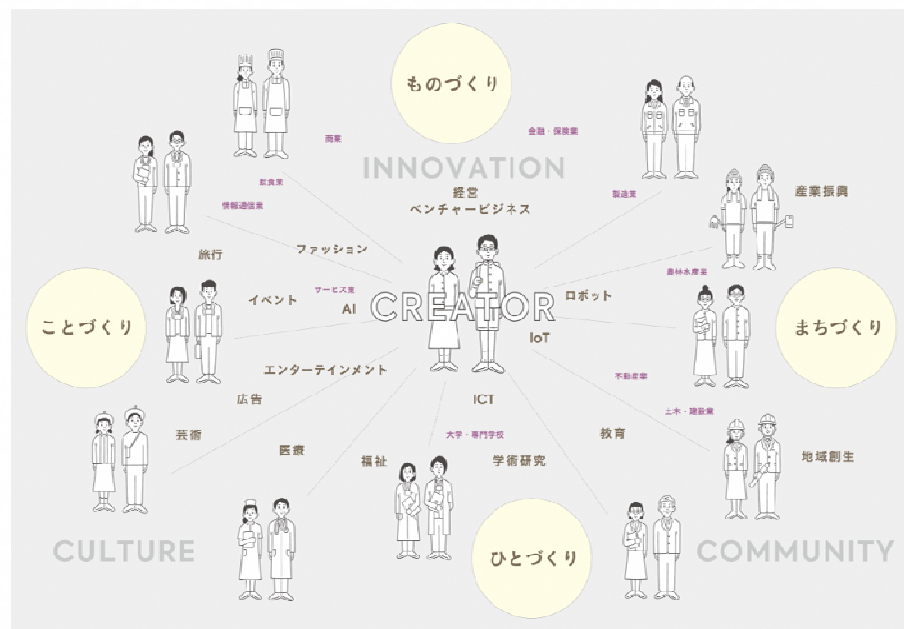


2. アートのまちづくりー8つの事例⑤

アート×ものづくり (ビジネス)

『MEBIC』 (大阪府大阪市)

概要	<ul style="list-style-type: none"> ➢ Media Business Innovation Center の略称 ➢ 大阪市のクリエイティブ産業を支える中核的産業支援施設 ➢ 大阪市で活動するクリエイター同士や企業等において「顔が見える関係」を築くためのコミュニティづくり、競争とコラボレーションによる新たなビジネスや価値を生む環境づくりに取り組む ➢ 「MEBIC流マッチング」として、直接紹介、メーリングリストの活用、クリエイター募集プレゼン、クリエイティブクラスターミーティング、イベントへの参加を行っている
背景	<ul style="list-style-type: none"> ①仕事がない ②デジタル化進展による良質なコミュニケーションの希薄化 ③クリエイティブ産業の細分化・マーケットの複合化 ④クリエイティブポテンシャルに対する低い認知度 <p>上記課題を抱える中で、大阪のクリエイターが活動しやすい環境の創出、クリエイターの自立と成長を促進する役割を担い、若手クリエイターの成長・支援を重視し中長期的視点で支援活動に取り組む</p>
効果	<p>MEBICをきっかけに生み出されたコラボの件数は2003年から2018年までで1,039件、金額にすると7億6,052万円である</p>



MEBICの役割『クリエイターと社会をつなぐ』
出典：MEBIC HPより

2. アートのまちづくりー8つの事例⑥

アート×教育

『レッジョ・エミリア・アプローチ』（イタリア）

概要	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 元小学校教師であり教育思想家のローリス・マラグッツィ(1920~1994)が世界水準へと高めたメソッド ➢ 第二次世界大戦後、ファシズムに加担した教会の幼稚園に子どもを通わせることを拒んだ市民が、<u>根本的な街の再生のためには幼児期からの教育が重要</u>であるとして幼児学校を設立 →現在のレッジョ・エミリア市の街ぐるみの教育に繋がっている
背景	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 学校教育では、主体的な学びが求められており、<u>イノベーションを起こせる人材の育成が喫緊の課題</u> ➢ これからの社会に必要な「表現力」「コミュニケーション能力」「探求心」「考える力」を養うためには、<u>幼児期での遊びを通じての能動的な学び</u>が求められている
施設	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 本メソッドを支える施設の「レミダ」は「サスティナビリティ」「クリエイティビティ」「リサーチ」を目的に1996年に設立された ➢ 製品にならず捨てられてしまう<u>多種多様な素材</u>が置かれ、<u>子どもたちの学びの機会</u>を提供している
効果	<p>不要品や廃材に価値を与え、「コミュニケーションと創造性を豊かにする文化的プロジェクト」として近隣都市にも広がり、<u>持続可能な教育</u>を作り上げている</p>



2. アートのまちづくりー8つの事例⑦

アート×マーケット

『葉山芸術祭 青空アート市』（神奈川県三浦郡葉山町）

- 概要
- 神奈川県三浦郡葉山町で開催されている住民主体の芸術祭の一環
 - 個人住宅、図書館、寺社、海岸、店舗等を会場として4～5月にかけて100以上のイベントを開催



葉山芸術祭 青空アート市 出店：葉山芸術祭HP

『かめおか霧の芸術祭 KIRIマルシェ』（京都府亀岡市）

- 概要
- 亀岡市が事務局となり2018年からスタート
 - 地域経済を生み出すアートマルシェや社会形成につながる芸術講座、環境をテーマにしたプロジェクトなどを通年で開催
 - 作り手とのコミュニケーションを通じて、手から手へものがたりが繋がる学びと創造のマーケットを目指す
 - ごはんやおやつを楽しみながらアートの展示やワークショップ、買い物を楽しめる



KIRIマルシェ 出典：かめおか霧の芸術祭HP

『ミュゼマルシェ』（神奈川県三浦郡葉山町）

- 概要
- 山梨県立美術館及び文学館が主催で開催
 - 『山梨のクリエイター文化を発信するイベント』がコンセプト
 - 2015年より美術館敷地内の芸術の森公園を会場にクラフト市等を開催



ミュゼマルシェ 出展：ミュゼマルシェHP

2. アートのまちづくりー8つの事例⑧-1

アート×本

『Public Collection』（アメリカ インディアナポリス市）

<p>概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 公共図書館とアーティストラッセル・シモン氏によるプロジェクト ➤ 市民の教養の向上と地元の芸術家への感謝の気持ちを表現 ➤ アーティストがデザインした、無料のミニチュア図書館を街中に設置 ➤ サイトスペシフィックなブックシェアステーションは、多様な利用者が興味を持つ様々な本を保管し、幅広い年齢層に対応している
<p>背景</p>	<p>「文学やビジュアルアートはみんなのものでありコミュニティのみんなで共有されるべき」というシモン氏の願いが込められている</p>
<p>効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 街中において、本・アートとの偶然の出会いが、知識と意識、文化やインスピレーションが街を循環し、コミュニティの形成にも力を注いでいる →八戸市のブックセンターにおいても、コミュニティの創出や地域のモニュメント的な役割を担っており、創造力やインスピレーションを与える場所である。洗練されたブックディレクションや緻密に計算された知の本棚もアートの1つであり、アートと本の相乗効果が発揮される取組が必要である



Stuart Hyatt & S+C 『Table of Contents』



Kimberly McNeelan 『Evolution of Reading』

出典：未来ヨコハマカルチャー会議HP

2. アートのまちづくりー8つの事例⑧-2

アート×食

『ごちそうアートトレイン』（群馬県）

概要	<ul style="list-style-type: none">➢ アーティスト中山晴奈氏と群馬大学および上毛電鉄によるプロジェクト➢ 参加者それぞれの特技やキャラクター等の情報を整理し、イベントに落とし込んだ➢ 上記の結果、地元食材を使ったコース料理を振る舞う移動レストラン、農家の方による食材の講座、途中駅でのジャズ演奏、地域の方が車掌になる演出など、地域の方が実践したい多様なコンテンツが盛り込まれたイベントが実現した
背景	文化庁の「大学を活用した文化芸術推進事業 美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成研修プログラム」の一環
効果	<ul style="list-style-type: none">➢ 複数のヒアリングを重ね、食にまつわる地域のコンテンツを発掘した➢ 地域のアイデンティティが構築され、活動を継続するために自発的に行動する人材を生み出した。➢ 上記により、新たなコミュニティが形成された。

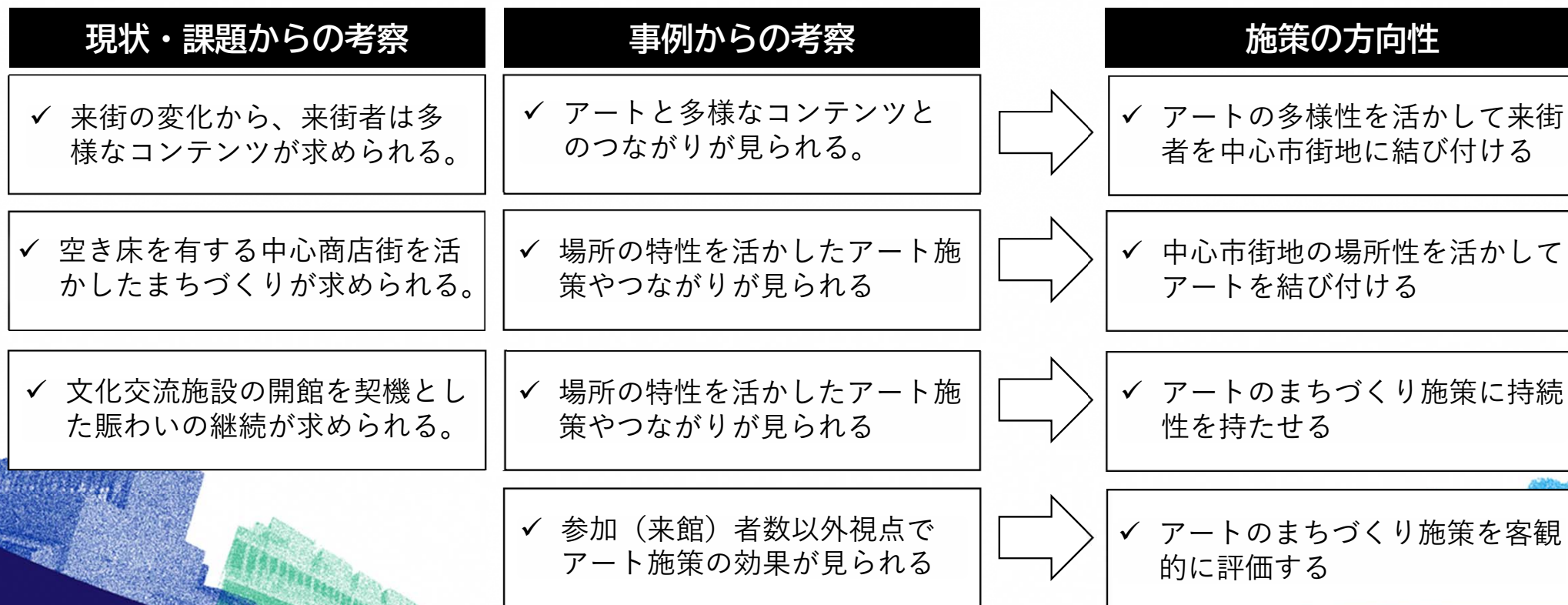


中心市街地が抱える課題に対して、
アート及び新美術館を軸にどのような
対応策が期待できるのか。



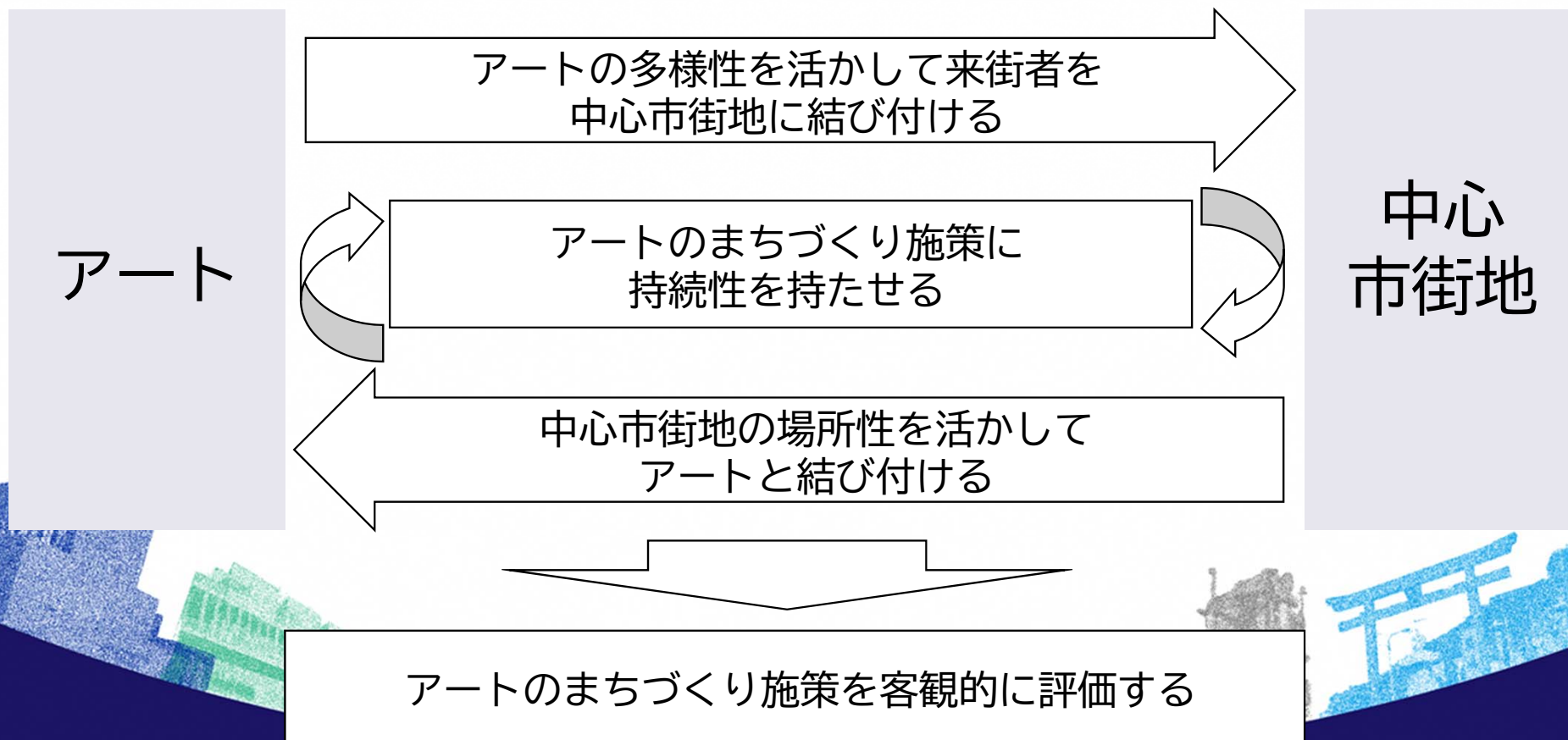
3 アート・新美術館を軸とした中心市街地の活性化①

対応策の方向性



3 アート・新美術館を軸とした中心市街地の活性化②

対応策の方向性の体系



3 アート・新美術館を軸とした中心市街地の活性化③

対応策の提案に向けて（これまでの議論から）

- ✓ アートのまちづくりを展開するにあたり、市民に温度差があることが課題である。その温度差を埋めるため「食」などの広い間口を持つコンテンツと掛け合わせた施策展開が考えられる。
- ✓ 中心市街地の場の特性として、①文化スポーツ施設が集積している、②空き床など遊休施設を有する商店街である、③横丁など「カオス性」を許容できるなどが挙げられ、これらとアートの特性を掛け合わせ、中心市街地と連携した施策を展開できないか。
- ✓ アートのまちづくりを継続的に進めるための要素として、①目的の明瞭化、②牽引できるアーティストの存在、③経済性への展開、④イニシアティブの確立などが考えられる。
- ✓ 八戸ではこれまでも官民の多様なアートプロジェクトが実施されてきたが、パフォーマンスなど形に残らないものが多く、これらを「消えものアート」と定義して、それらを可視化し、芸術祭のような形で展開できないか。
- ✓ これまでは来館者や参加者などを評価指標としていたが、アートプロジェクトは必ずしも人流だけで評価されるものではなく、新たな評価指標による検証を検討してみてはどうか。
- ✓ アートのまちづくりを展開するにあたり、アート面とまちづくり面が必ずしも双方利益の関係とはなり得ないことに留意しなければならない。

